

# 「源氏物語」が故郷だつた人

平瀬 隆之

寂聴さんには、三度お目にかかりました。二度目は全く偶然の出会いでした。

平成某年の秋のことです。私たち家族（私、妻、息子）三人は、京都・百万遍の「梁山泊」で昼食を終えて、店を出ようとしたその時です。寂聴さんが、雑誌社の人らしき数人とタクシーで乗り付けてきました。私が、三月にラジオ番組の取材でお世話になったNHKの平瀬ですと挨拶すると、

「ああ、あの時のアナウンサーさんね」と覚えていてくださった。そしていきなり、「あなたのパソコンやつている」と質問が飛んできたのです。

私が戸惑いながら、今や職場の書類はすべてがパソコンになりましたと答えると、「私も水上勉から勧められてね、今日は、パソコンがテーマで誌上対談があるの。源氏の翻訳にはうつつけだと思ふ。早く使えばよかつた」と呟くようにおっしゃった。妻が、「今、寂聴さんの源氏物語を読ませていただきたいです」と告げると、寂聴さんの顔から笑みがこぼれ、「有難う」と言つたかと思うと、私の方を振り向いて、「あなた幸せね、源氏を読む女性ほど素敵な人はいないわよ。いい奥さん持つたわね」と褒めてくださった。

寂聴さんは褒め上手で、こういう場合の去り際のセリフがとても素敵な人でした。法衣を翻して店に入していく姿

が、颯爽として、しばらく後ろ姿を追つたものです。

私が寂庵を訪ねたのは、その年の三月のことです。郷里・徳島に作られる文学書道館への期待と注文を聞くためでした。予定したインタビューの収録を終えたものの、私は今一つ満たされないを感じていたのです。寂聴さんから強烈な故郷愛を引き出せなかつた自らのインタビュー技術の拙さを反省しながら雑談に入りました。

寂聴さんは、郷里・徳島を舞台にした小説がほとんどない。これはかねてから私が訝しく思つてゐる事でした。そのことを尋ねると寂聴さんの表情が一瞬変わり、笑みが消えて何かを射抜くようなキリッとした目に変わりました。

「私にはね、土地に帰属したものは書けないの。生涯、

男と女がテーマだから。有吉佐和子さんに『紀ノ川』とい

う作品があるでしよう。土地の持つ長い歴史、培われた文化、そこで生活した伝統ある家系、どれ一つとっても紀ノ川と関係が深いわね。土地には地靈が宿つていて、有吉さんは、紀ノ川の地靈に導かれてあの作品を書いたのよね。私は、そういうインスピレーションを徳島から受けたこ

とがない。どうしても故郷をクールに分析的に見てしまうのね」と話した後、コーヒーの話が始まった。

「私はね、普段はお茶をいただくのだけど、徳島に帰るとコーヒーを飲むの。徳島には自家焙煎の店が多いから、どこの店でもコーヒーが美味しい。自家焙煎の店を京都で探すのだとて大変よ。徳島の人は凝り性なの、何事にも拘る。拘るというのは垂直思考。水平に広がつていかない。そこが、徳島の人と高知の人との違ひね」

寂聴さんは、のちに野間文芸賞を受けた自伝的作品『場所』がある。過去と現在が交錯しながら進行する「時間」が縦軸に、土地つまり「場」が横軸となる作品だ。地名はいくつか出てくるものの、作品のテーマを暗示するものではない。いささか即物的と思える「場所」という題名も、その点で理解できる。

——寂聴さんの現代語訳も手伝つて、このところ、源氏ブームですね。各地で朗読会も開かれています。

「結構なことです。日本人はアイデンティティを失つたと言われているけど、源氏物語を読めばいいの。いつだって心の故郷に戻れるんだから——。三島由紀夫がね、源氏

物語の巻の名を聞くだけで、感性が動き出すと言つてゐる。  
まったくその通りね」

——寂聴さんが「光源氏」を語る時、「ヒカルゲンジ」と語頭にアクセントを置きますね。私にはあれがとても新鮮に響いて、一層、光源氏の存在が輝かしいものに感じられますが…。

「源氏はもともと、光る君、光る源氏と呼ばれた。そんな事が私の潜在意識にあったかも知れない。源氏は本来、宫廷に仕える女房が、若い姫たちに語つて聞かせたものだから、当然、語り手の個性が働いたり、感情移入もあったり、時には即興で小さなエピソードを挟んだりして、いろいろな工夫があつたと思う」

——幸田弘子さんや白石加代子さんらの素晴らしい朗読がありましたが、寂聴さんの念頭にある法話調の朗読も聞いてみたいなあ…。

「私は駄目よ。すっとん狂な声だから。それに阿波弁の訛りもあるようだし…」

——司馬遼太郎さんが、京ことばの原型は阿波ことばにあると言つていますが…。

「ああ、あれは確か『街道を行く』だつたね。私も読んだけど、根拠のある話でもなさそうだし、エキセントリック過ぎる。どう考へても逆よね。公卿たちが西へ下つたのだから…」

——源氏物語に話が及んで、雑談は尽きなくなつてしまつた。ひょいと時計を見ると、お暇の時間がきている。寂庵にいると時間の経つのを忘れてしまうと言うと、

「日本には、古来から、源氏的時間が流れている。あの本に書かれた色恋、政争、日常の人間関係は、嘗々と続いているのね。源氏物語には大団圓というものが無い。流転あるのみ。嘗々の時間ね。これは仏教思想の根幹かもしない」

——そう言えば、同じ好色の主人公スペインのドンファンは、最後、地獄に落ちて終わるのですよね。

「そうそう断罪ね。西欧は罪の文化だから。ところであなたは、源氏物語の女性の中で誰が好き」

私は、にわかに返答に窮したが、

——妻をめとらば、紫の上でしようかと答えた。寂聴さんは、即座に、

「あなたもやはり日本男児ね」とおっしゃった。

私は帰りの電車の中で、【紫の上＝日本男児】と、幾度も反芻しながら、はつと気がついた。寂聴さんの故郷は、徳島でも京都でもなかつた。それは「源氏物語」だつたということに。

「場所」の終幕で、寂聴さんは「出家とは生きながら死ぬこと」と書き残している。裏を返せば「出家によつて永劫の時間を得た」と私は理解する。「場所」で描かれた生涯に、悔恨の念は薄い。生と性を思う存分謳歌した寂聴さん。にもかかわらず、女性を失望させることもなく、男性の恨みを買うこともなかつた。これこそ多く読者をひき付けた理由ではないか。今、彼の地で、光源氏とどんな会話が弾んでいるのか、想像するだに楽しい。